

歴史情報論の立場と経験から

落合 延孝

名誉教授

Nobutaka OCHIAI

Professor Emeritus

はじめに

1993年10月に社会情報学部は創設され、今年(2013年)で20周年を迎える。群馬大学は戦後の発足とともに教育学部・医学部・工学部の3学部のままできたが、文系の社会情報学部の創設によって群馬県内で唯一の総合大学の位置を占めることになった。

1980年から教養部に所属していたが、1991年から92年の頃は、教養教育の改革(=教養部解体)と新学部創設の大変忙しい時期であった。教養部解体に反対する多数の自然系教員と社会情報学部の創設を主張する人文・社会系の少数の教員とが対立し、教授会も毎回午後7時過ぎまで行われた。難産の末、社会情報学部が誕生した。

1994年に社会情報学部は一期生を迎えた。歴史も伝統もない新学部に来た一期生は個性豊かな学生が多かった。今でも忘れられないのは、一年生の学修原論の授業である。学生同士で90分間報告と質疑・討論を行い、最後に私が少しまとめを行ってゼミが終わるが、学生同士の討論が活発で、私が発言することはほとんどなかった。卒論発表会も学生が次々に質問していた。今では考えられない授業風景である。

本稿は、社会情報学部の研究・教育について、学部の創設から在籍した一教員として、歴史情報論の立場と経験から考えてきたことを述べてみたい。

1. 高度情報社会と社会情報学

群馬大学社会情報学部は、国立大学初の「社会情報学部」として発足し、国立大学では唯一の社会情報学の学部教育機関である。本学部は、情報科学と人文・社会科学との融合のもとで「情報と人間の共存」の在り方を追究することを基本理念としつつ、現代社会の要請に応えるべく鋭意教育・研究を積み重ねてきた。本学部が創設された1990年代は、高度情報社会に突入した時代でもあった。1990年前後から、情報をめぐる環境が大きく変化してきた。社会情報学部が創設された1993年のケータイは200万台であったが、5年後の98年には4731万台と20倍に増加し、21世紀に入り1億台を超えた。

インターネットとケータイ，近年ではスマートフォンが急速に普及し，画像・音声・文字などの情報を多く入手することができるようになり，瞬時にして膨大な情報を収集・蓄積・伝達することができるようになった。これらの新メディアはマスメディアとは異なり，双方向の情報発信としての性格を有し，どこにでも移動でき，あらゆる空間に偏在するユビキタス社会を象徴するメディアとなった。

本学部の創立以降，1994年にインターネットが日本に本格上陸し，95年にWindows 95，デジタルカメラが初登場し，96年にDVDが発売され，99年に携帯電話・PHSが普及し，iモードサービスが開始され，まさに「メディア革命」の時代であった。時代のニーズが，社会情報学という学問をつくり出したといえる。

また，社会情報学部が創設された頃，昭和から平成への時代の変化は，高度経済成長の終焉，東欧の社会主義体制の崩壊，それに続くソビエト連邦の崩壊，20世紀から21世紀への世界システムへの転換の時代であった。

このように社会情報学部は，21世紀社会システム，高度情報社会への移行の時代に生まれたといえる。この学部の特徴は，伝統的な人文科学・社会科学のエッセンスを学びながら，情報科学を学ぶことができる。先端的な情報処理技術を身につけ，さらに人文・社会科学の多様な領域の学問を学び，広い視野と深い学問的基礎の上に社会情報学を修得できるようにカリキュラムを組んでいる。卒業生からのアンケートで，学部教育で良かったと思うことについては，「総合的に幅広く学修できた」「今の時代のニーズに合っている」という意見が多くあった。

しかしながら，その一方で，「学部としての専門性がはっきりせず，イメージが漠然としている」「わかりにくい」「もっと専門分野に特化したカリキュラムを組むべき」という意見も多くあった。

学際・総合性のメリットを残しながら，学科ごとに高い専門教育を提供できるようにカリキュラムを検討し，2006年4月から従来の一学科をより専門性を重視した二学科構想に再編した。幅広い社会情報の領域を，人間と社会に切り分けて，情報・メディアを軸に主に人間を中心に分野横断的な専門性を身に付けさせる学科（情報行動学科）と主に社会を中心に段階的な専門性を身に付けさせる学科（情報社会科学科）とに編制し直した。新学科設置の際に，設置審から「「情報社会」ないし「情報社会科学」の全体像について教え，学ぶための総括的科目の展開を期待する」という要望意見が提出され，さらに，文部科学省からは博士後期課程設置の説明時（2008年11月7日）に，「情報社会科学科はいかにも社会科学の科目が並んでいるが，情報との関連が見えにくい」という指摘を受けている。高度情報社会を社会科学の視点から展望する研究を期待されている。

二学科体制になって7年が経過しており，学部教育が「学際・総合性のメリットを残しながら，学科ごとに高い専門教育を提供」できているか否か，学生へのアンケートをとりながら，検討する作業が必要となっている。

この20年間の学部の研究で注目されたのは，下田博次教授の中学高校生の携帯インターネット利用に関する研究である。中学生・高校生を対象とした全国調査を行い，彼らがケータイを肌身離さず持ち歩き，インターネット端末として使い，授業中にメールや各種サイトを利用している実態が明ら

かにされている。親や教師は実態把握ができず、授業中のケータイ使用への生徒指導に難しさを指摘している。このような高度情報社会がもたらす光と影についての社会情報学研究が注目された。

社会情報学は、情報という視点から人文科学・社会科学を捉え直す研究である。正村俊之によれば、社会を成り立たせている人間の活動はすべて情報に媒介されており、情報はあらゆる社会現象に内在している。それゆえ、社会情報学は、①「情報」を視点として社会諸現象を解明する学問であり、②情報は人間社会を成り立たせている基本要素であり、③情報を単一に抽出して研究してはならない、④人間も社会も社会情報現象を成り立たせている基本要素であると正村は指摘している¹。

教養部を母体として生まれた当初、学部にも所属する教員は私を含めて自分の専門分野と社会情報学との関係をどのように考えるかという問題を突きつけられた。社会情報学部の研究は、社会情報学特有の研究と「情報」という視点から自分の専門研究を考える二つの柱から成り立っている。学部が推進する研究課題「社会情報化の進行をめぐる諸側面に関する総合的研究」の成果が、『群馬大学社会情報学ハンドブック』（国立大学法人群馬大学社会情報学部、2005年）としてまとめられた。このハンドブックは、現時点においても社会情報学部の研究の構図を見るのに役立っている。

2010年より黒須俊夫教授の後を継いで、「社会情報学入門」を担当した。この講義を担当するなかで、「情報」「社会」という概念を学習し直した。

明治期では「情報」という言葉は、軍事情報の意味として使用された。森林太郎(鷗外)訳のクラウゼヴィッツ『大戦学理』（1903年）の中で、「情報とは、敵と敵国とに関する智識の全体を謂ふ」という意味で使用されている²。

日本で最初に情報社会を論じたのは、福沢諭吉『民情一新』（1879年）である。近代文明の本質が、蒸気船車、電信、印刷、郵便の4つに代表される「インフォメーション」の技術にあり、これらの技術に媒介されたコミュニケーション環境の変容が、「社会の形勢」を大きく変えると論じた。日本社会が、イギリスのように国中縦横に鉄道が敷設され、新聞・雑誌・郵便が即日に国中に配達されるようになれば社会の形勢が一変すると論じた。

informationの意味を正確に認識した最初の日本人は福沢諭吉である。福沢は、「余を以て此語を解すれば、智とは必ずしも事物の理を考へて工夫する義のみに非ず。聞見を博くし事物の有様を知ると云ふ意味にも取る可し。則ち英語にて云へば「インフルメーション」の義に解して可ならん³と述べ、インフォメーションを「聞見を博くし事物の有様を知る」と定義している。そして、情報は社会全般に直接的な影響を及ぼし、人類内部の精神を動かして智徳の有様をも一変させるとしている。

福沢は『学問のすすめ』（1874年）の中で「社会」という言葉を使用している。『文明論之概略』（1875年）の中で、「社会」＝「人と人との交際」、あるいは「人間交際」と定義している。具体的には、人民の会議、社友の演説、道路の便利、出版の自由等を挙げている。福沢は「社会」を人と人とのコミュニケーションとして捉えている。それ故、文明の進歩とは、「人間交際」、つまり社会のコミュニケーションが増大し、複雑化する過程であり、そうしたコミュニケーションがなければ、才智も発達しないと考えていた。

さらに、その時代にあつて普く人民の間に分賦せる智徳の有様を顕わしたのものとして「衆論」を提起している。幕末期における攘夷論も福沢によれば、「報国心の粗かつ未熟なる者なれども、その目的は国の為なるが故に公なり、その議論は外夷を攘うの一箇条なるが故に単なり。公の心を以て単一の論を唱れば、その勢必ず強盛ならざるを得ず。これ即ち攘夷論の初に権を得たる由縁なり」「攘夷家は益勢を得て憚る所なく、攘夷復古尊王討幕と唱え、専ら幕府を殲して外夷を払うの一事に力を尽せり」と評価している。

「衆論」の高まりの第一段階として、天明文化の頃から「人民の智力」の分銅の重さが増してくると評価している。18世紀後半から19世紀前半の江戸庶民の文化力を評価している。そして、「衆論」の第二段階をペリーの来航とし、「人民の智力」の分銅をにわかになりに重くする契機となったとしている。

福沢はまた、社会を数量的に把握する社会科学の方法を提言した。人文・社会についての観察を、自然科学のように計測可能な、予測可能な学問に高めようとした。それには大量観察を行って、そこから規則性(regularities)、あるいは法則性(laws)を見出していく。「天下衆人の精神発達を一体に集めて、其の一体の発達を論ずる」ために、統計学の方法を提起した。スタチスチク(統計)法は、「人間の事業を察してその利害得失を明にするため欠くべからざるものにて、近来、西洋の学者は専らこの法を用いて事物の探索に所得多しという。およそ土地人民の多少、物価賃銭の高低、婚する者、生るる者、病に罹る者、死する者等、一々その数を記して表を作り、此彼比較するとき、世間の事情、これを探るに由なきものを、一目して瞭然たることあり」(『文明論之概略』)と述べている。

このように福沢は、1870年代に情報の概念、メディア、情報社会論、衆論、社会科学の分析方法を論じていた。

話しを戻すと、3年間の「社会情報学入門」は、私にとってはよい勉強となったが、4人の輪講の現在の授業内容が社会情報学の学問内容に相応しいかを検討する必要がある。この授業と「社会情報学A・B」は、学部のカリキュラムの中では「根幹」をなす学部共通科目群である。特に、「社会情報学入門」は、高度情報社会論を広く深く分析できる社会情報学を専門とする教員を中核に授業内容を構成する必要がある。

2. 戦後歴史学からの転換期

1990年代の中頃は、戦後歴史学から現代歴史学への転換期でもあった。「戦後日本の歴史学の流れ」は、第二次世界大戦以後の日本の歴史学を三つの時期に区分している⁴。第一期(1945年～1970年代前半)は戦後歴史学の時代であった。戦後歴史学と呼ばれる知の枠組みの形成と確立の時期で、「社会構成体史の時代」・「社会経済史の時代」である。封建制を克服し、あるいは半封建的遺制を一掃して「近代」を実現する共通理念があった。その中心となったのがマルクス主義歴史学や丸山真男・大塚久雄の近代主義の政治思想史・経済史であった。マルクス主義的な発展段階論と地域史料の発掘(実証主義)とが結びついて、農民層分解、藩政史、地主制、階級闘争史の研究が盛んに行われた。

第二期(1970年代後半～90年代前半)は、戦後歴史学の時代から社会史の時代への移行期であつ

た。1968年から69年の世界の各地で学生叛乱が起り、目指すべき近代や民主制に対する批判的な視点が現われた。日本の高度経済成長によって物質的には豊かになり、「変革主体」のもつリアリティが稀薄化していく。戦後の被害者意識から加害者の戦争責任を問う時代になる。社会史の代表的な仕事として、網野善彦、阿部謹也などがその最初である⁵。

第三期（1990年代半ば～現在）は、「長い戦後歴史学」から現代歴史学への転換期である。安丸良夫は、「一九九〇年前後を境として、日本の歴史学界はまた一つの転機に入ったように思われ、近代歴史学への認識論的な批判、国民国家(批判)論、フェミニズムと女性史研究、カルチュラル・スターディーズ、ポスト・コロニアリズム批評など」⁶と述べ、第三期の研究動向には近代歴史学への認識論的な批判、国民国家論、フェミニズムと女性史などの新たな研究がある。

1990年代以降、日本においてもグローバル経済の下で新自由主義の考え方が強くなり、90年代半ば頃から、藤岡信勝らが「自由主義史観」を提唱し、現行の教科書を「自虐史観」＝「日本国家に対する一貫した悪意」と非難しはじめた。アメリカの国家利益を反映する「東京裁判史観」とソ連の国家利益に由来する「コミンテルン史観」が戦後歴史教育の原型を形づくったと批判した⁷。特に、従軍慰安婦や南京大虐殺などの加害の歴史に関する記述を批判した。そして、1997年1月に「新しい歴史教科書をつくる会」が結成され、2001年に同会の中学歴史教科書が検定をパスしたが、中国や韓国政府から強い批判が出された。七三一部隊の人体実験や南京大虐殺の加害行為をたいしたものではないとし、戦争の記憶を稀薄化しようとする「歴史修正主義」の考え方が強くなってきた。

アジア・太平洋戦争の死者は、日本人だけで250万人余り、アジア諸国で1800万人余りに及んだ。この悲劇を真摯に受け止め、平和を希求することから戦後民主主義は出発した。東京大空襲、広島・長崎への原爆投下、日本で唯一の地上戦が闘われた沖縄戦では、「友軍」であるべき日本軍によってスパイ容疑で虐殺され、肉親同士（息子が母親を、兄が妹を）が殺し合う集団自決の地獄図が展開された。戦争の事実をどれだけ深く心に刻むかという戦争の記憶と歴史認識の点で、同じ敗戦国のドイツと比較すると、戦後日本はどれだけ「過去の克服」を行ってきたのか。21世紀の今日においても、首相・大臣の靖国神社参拝、従軍慰安婦問題などが外交問題となり、70年近い歳月が流れても「過去の克服」が十分に行われず、歴史認識の問題が問われる現実が今ここにある。

さらに、1990年代以降の新自由主義は、日本の社会に大きな影響を与えた。1990年代からの20年は「失われた二〇年」とよく言われる。教育学部の山田博文教授によると、この20年で終身雇用と年功序列賃金が解体し、非正規労働者数は1986年673万人から2009年には1721万人に増大し、労働人口の三分一を占めるようになった。一日8時間・週五日間働いても年収140万円台で、生活保護基準に届かない。年収200万円以下の労働者は、2006年に1023万人に及んでいる⁸。この20年で一番失われたものは労働者の雇用であり、日本は若者が希望を持ってない社会になってしまった。

新自由主義の時代、大学の世界も大きく変容し、人文・社会科学の学問の性格も変容してきた。源川真希は、近年の社会科学の分野で研究動向として、経済学や政治学などは数量分析を踏まえた理論研究によって社会現象や人間行動を説明する研究が増え、歴史分析を積み重ねていく方法が周縁に追

いやられている傾向を指摘している。また、人文科学の分野でも、現状の社会に対してクリアな説明を与えてくれる社会学や自分自身を見つめることができる心理学に学生の強い関心があるとしている。人文科学の中での歴史学の地位が相対的に低下する中で、歴史学という学問が知的な刺激をどれだけ発信できるかを問い直している⁹。

その意味で3.11 体験は、明治維新以降の日本の近代社会、近代文明のあり方、自然と人間とのあり方の再考を迫るものであった。田中正造は今から百年前に、「デンキ開けて世間暗夜となれり」（1913年7月21日 日記）と喝破し、「真の文明は 山を荒さず 川を荒さず 村を破らず 人を殺さざるべし」（1912年10月6日 日記）と物質文明のあり方を根底から批判していた¹⁰。

アジア・太平洋戦争、尖閣列島・竹島・北方領土などの国境問題、地震や津波の自然災害も、過去の史料、歴史の文脈から捉え直すことが大切であるは言うまでもない。

3. 歴史情報論へのアプローチ

1990年代に入って、歴史の学会でも歴史情報論の論文が出はじめる。「歴史学研究」は「情報と歴史学」の特集を組み、「情報という概念を各人の歴史研究の中にどのように有機的に組みこむかが、歴史研究の一つの勝負どころになり始めている」¹¹と述べている。

宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質」は、歴史情報論の代表的な論文である¹²。日本の各地の豪商・豪農の家には、「雑書」「新聞」「風聞集」などの名前で膨大な情報を記録した風説留が残されている。それぞれの地域で可能な限りのつてを通じて情報を入手し、それを蓄積していたのである。風説留の内容は、各種の漂流記、従来の政論の反芻、時事に関する論説と政治批判、チョボクレなどの民衆レベルの政治批判、画像資料（黒船・御台場建設・横浜絵・政治風刺錦絵など）などが多い。特に1853年のペリー来航以降の幕末維新期の情報が多く、地方にしながら、江戸・京都・大坂の動きを克明に記録している。風説留に記録された大量の情報は、幾層にも重層した経済的・文化的な全国的ネットワークがその前提として存在していた。宮地は幕末期における情報集（風説留）の全国的な成立を、近代国民国家の前提となる「公論」的世界の萌芽と位置づけ、幕末期の情報のなかに近代日本への道筋を見出している。

社会情報学部の創設とともに、私の研究対象も日本近世史だけでなく、歴史を情報という視点から捉え直す仕事をしてみたいという気持ちが強くなってきた。社会を成り立たせている人間の活動はすべて情報に媒介されており、情報はあらゆる社会現象に内在しており、情報を広く社会・歴史・文化・思想的な見地から捉え直すことが求められた。そして、設置審の縛りが解けた1998年より学部の専門科目として「歴史情報論」を開講した。

そして、「歴史情報論」の授業内容を創るために、1998年から上野国那波郡連取村（群馬県伊勢崎市）に住んでいた森村新蔵が幕末維新期の膨大な政治・社会・災害情報を記録した「享和以来新聞記」を読みはじめ分析した¹³。

森村新蔵は、幕末維新期の膨大な政治・社会・災害情報を「享和以来新聞記」に記録した。記録の

動機は、「此記ハ、享和度以来の世の風聞珍ら敷事共、聞シ俣ヲ書載、其事の実否を不正候得は、誤り記ス事可被多、見る人は是ヲ免シ玉ひ」（巻一）と記されている。享和以来の世の中での風聞や珍しい事をそのまま書き載せ、その事の実否を正すことはしないので、誤りがあることをことわっている。間違っていると思われる情報でも、そのまま記録しているのが新蔵の情報収集の原則であった。幕末の江戸・京都を中心とする政治社会情報をかなり正確に認識していた森村新蔵が、どのような人間関係やルートで情報を入手できたのかを明らかにした。彼は連取村及び周辺の地方支配の中心的位置をいて、さらに周辺の村役人とのネットワークを持っていた。商人、農民、医者、下級武士、地方の文人など時局を共有し合った人々の、提供者が同時に受容者でもある情報のネットワークが、一つの社会層をなし、一定の地域性をもって形成されていたことがわかる。

情報のネットワークを研究すると、互いの蔵書の貸借や俳句・漢詩などのサロン、「詩歌書画俳諧插花会」の地域の文化的なイベントを通して、情報を共有する地方役人たちの人間関係と文人の活動範囲とがほぼ重なることが具体的にわかるようになる。情報の発信・伝達・収集・蓄積という行為は主にパーソナル・コミュニケーションを中心としているが、幕末期になると刷り物や新聞などのマスメディアからの情報も記録するようになる。「新聞記」の本文の見出しは、巻一から巻十四上までは巻二下の「享和以来新文紙」以外は「享和以来見聞記」と記され、巻十四下、巻十五、巻十六の三冊は「享和以来新聞記」と記されている。「見聞記」から「新聞記」への呼称の変化は、まさに新聞の誕生によるものである。

風説留を研究すると、今まで見えなかったものが見えるようになってくる。風説留は二次的な史料として評価されてきた。第一次史料を筆写し、うわさや流言なども記録されており、それを使う場合には史料批判を必要とした。その反面、検地帳や年貢関係の地方文書ではなかなか把握することのできない全国的な情報が記録されている。幕末維新期の豪農や村役人たちの社会的結合は我々が想像する以上に広く、伊勢崎にいても江戸・京都・大坂の情報を入手することができた。

地域行政や地域社会の運営においては、経済活動、地方文化を担う階層はかなりの部分で重なり合っており、情報のネットワークが地域的な公共的世界を形成していたと評価できる。

「享和以来新聞記」に記録された膨大な情報は何を意味していたのであろうか。新蔵は自らの歴史体験や記録することによって、歴史学習を行っている。ペリーの来航を機に、新蔵は同時代への関心を深め、記録する情報量が急激に増えていく。新蔵が国際情勢と自然災害に特に関心を持っていたことは、「新聞記」の「附録雑集」に、1783年の浅間山大焼と大黒屋光太夫の漂流記『漂民御覧之記』の内容が記載されていることから理解できる。天明の浅間山の噴火を直接体験していないが、体験した老人から「昔浅間山大焼の時ハ世界も皆覆へるかと思ひバ、生有ル心持ハなかりし」（「北国見聞記」巻九）という話しを聞く。全国の大山の噴火の中で、その被害の深刻さにおいて突出していることを認識している。天保飢饉を論じる際に、天明飢饉の史料を筆写し、天明と天保・慶応の物価を比較している。旅をしながら他地域の天保飢饉の認識を深めている。天明一天保一慶応という時期で飢饉や幕末の諸事件を捉えようとする歴史意識がそこにある。

新蔵が情報を求めた切実な理由は、岩鼻代官所の支配が崩壊し、旗本駒井氏の領主支配も動揺し、地役人を支える権力の拠り所が無くなり、新蔵たちを直撃したことである。権力の崩壊によって、自らの社会的基盤を動揺させていった中間層にとって、迅速な情報を収集・蓄積しうる力量がなければ、幕末維新の激動の時代を生き抜くことはできなかったといえる。

このように、歴史情報の研究は、幕末維新期の人々が記録した「聞書」「風説留」などの分析を通して、人々がどのような人間関係や文化のネットワークを通して情報収集したかを明らかにする研究や史料集の刊行などの成果を生んだ¹⁴。

4. 歴史情報論の課題

21世紀に入ると、在村文化、歴史情報論、地域社会論などの研究が、地域史料を丹念に掘り起こすなかで新たな展開をみせてきた。高部淑子「日本近世史研究における情報」は、特集「歴史研究の最前線」のなかで、1970年以降の江戸時代における情報史研究の動向を論じている¹⁵。情報は様々な分野を複合的に捉えることができる素材を提供しており、情報の分析視角の有効性を活かすことによって、学際的・総合的な研究を生み出すことができる。

ここでは、21世紀に入った歴史情報論に関する研究動向について言及してみたい。情報収集に関する研究は、前述した風説留の諸研究があるので、それ以外の諸研究についてふれてみたい。

第一に、情報伝達に関する研究がある。「うわさ」はもっとも古くあるメディアであり、文字が書かれる以前では、口伝えの伝達が社会におけるコミュニケーションの唯一の経路であった。「うわさ」は人々にニュースをもたらす情報源として大きな役割を果たしていたのである。中世史では、酒井紀美や山田邦明などの研究がはじまっている¹⁶。近世史でも、鈴木浩三などの研究がある¹⁷。

また、情報伝達を支える飛脚問屋などの情報通信に関する研究がある。情報の全国的なネットワークの形成では、社会情報学研究科で学んだ巻島隆が、飛脚問屋の精力的な研究を進めている¹⁸。上州の飛脚問屋を系統的に研究している巻島隆は、「上野名跡誌」を著わした富田永世を分析して、飛脚問屋が手紙や情報の伝達だけでなく、俳句・狂歌や地誌編纂などの在村文化の担い手であることを明らかにしている。地方に散在する文人のネットワークを結びつける環として飛脚問屋が大きく関与していることを明らかにした。

飛脚は書状の運搬だけでなく、ニュースの運搬も行い、江戸・大坂・京都のほか、東海道の各宿駅に起こった災害を、迅速に関係方面に印刷して通信し、書店はそれによって災害の一枚刷りを発行するようになった。1855年の安政の江戸大地震の際、多数の一枚刷が出た外に、多数の錦絵の戯画や小型のパンフレットがでた。災害情報の伝達、印刷などに飛脚問屋や本屋の果たした役割は大きい。

第二に、メディアやコミュニケーションの歴史に関する研究である。

江戸の町人が日常的にどのような会話を交わしていたのかを歴史の史料から読み解くことは難しい。むしろ江戸時代の文学作品を通して、江戸町人のコミュニケーションを分析することもできる。青木美智男は、式亭三馬の『浮世風呂』を歴史学の視点から分析し、男湯と女湯での町人たちの話題

を見事に描いた¹⁹。女湯での女性たちの会話は、子どもの手習いや稽古事などの教育や源氏物語などが話題になっている。

18世紀後半から寺子屋が普及し、農民や町人たちの読み書きソロバンのリテラシーが高まり、俳諧・漢詩・和歌・狂歌・書画などの文化イベント通して在村文人の文化活動が活発になる。村や町の豪農や富裕な商人たちは、文人相互の書籍貸借や貸本屋から借りて写本という形で情報を蓄積している。

私が歴史研究を始めた1970年代頃の史料調査は、主に社会経済史に関わる検地帳や年貢帳などを主に写真に撮り、所蔵の書籍などは必要のない「雑」として扱われていた。近年の研究は、書籍が所蔵者の思想形成にどのような影響を与えたかを詳細に分析している。

「書物・出版と社会変容」研究会などを中心にして書物・出版やメディア史の研究が精力的に行われている。19世紀に入ると読売・一枚刷りと呼ばれる災害情報や事件報道が盛んになり、パーソナル・コミュニケーションだけでなく、マスメディア史、引札などの広告史、さらに浮世絵・鯨絵・役者絵などの絵画や文学の領域に広がる可能性を有している。

第三に、情報の蓄積・保存に関する研究である。幕末維新期の農民たちは、村の検地帳や年貢帳の史料を読みながら、地域の歴史や同時代の生活世界の変化を鋭く見つめ記録として残している。岩橋清美によれば、「語る」歴史から「書く歴史」への民衆地域史のパラダイムは、自律的な地域の成立と民衆による体系的学知（考証主義的手法）の摂取という二つの要素によって成立した。史料調査や実地調査に基づく考証主義的手法が地域文人の世界で成立しているのである²⁰。

たとえば、信州乙事村（長野県諏訪郡富士見町）の史料は、すでに江戸時代から文書を収納する「帳蔵」が存在していた。従来名主の手元にあった村方文書が、19世紀に入り「帳蔵」に村の共有物として保管されるようになった。文書館がすでに江戸時代から存在していたことになる。記録史料学（アーカイブス学）という学問分野が急速に発展し、文書が作成された当時の原秩序から現在の配列に至るまでの過程を解明する研究がはじまっている²¹。

第四に、歴史のなかの集合心性、情報行動に関する研究である。この問題を提起したのは、フランス革命史家G・ルフェーヴルである²²。ルフェーヴルは、人々が集合する場に注目し、そのなかでお互いの中に、「心的相互作用」が働き、「集合心性」が形成されるとしている。日曜日のミサの後での教会の中や前の広場での村の寄合、居酒屋での話し合いがなされ、日曜に決められた計画が月曜に実行に移される。市場は村の住民が町の住民と交渉を持ち、情報を入手する場である。日常的な「語り」は、ものの考え方・感じ方を共にするような心的作用をもたらし、語らいに次いで、印刷物、歌謡（シャンソ）、演説などのプロパガンダが、集合心性の形成に寄与する。情報は、集合心性とうまく調和するように変形され、そうした形をとることによって、集合心性の基本的な観念を確固たるものとし、集合心性の情動的要素を高ぶらせる。特に、集合行動においては、「敵役の設定」を設定し、経済状況が悪化すると、敵役のイメージをひたすら邪悪陰険に描くようになる。フランス革命の際に、食料不足を「アリストクラートの陰謀」のせいにして上げた。江戸時代の百姓一揆の場合には、悪

代官や悪臣への攻撃が行われた。

佐竹昭広は明治初年の新政反対一揆の社会心理的な背景に、民衆の想像力の基盤に民話の伝承によって培われてきた共通の心理的基盤があるとしている。民話の世界には、主人公が恐ろしい所で恐ろしい奴から膏や血を絞り取られるという昔話が、日本の全土に分布している。昔話の分布の空間的広さは、その歴史の時間的長さに対応しており、理解を絶した外国の文明に対する疑心暗鬼の念が、「血取り」「膏取り」などの民間伝承と結びついて、明治初年頃に同じような風説を生んだとしている²³。

ええじゃないかの研究においても、情報という視点から捉え直す研究が出ている。渡辺和敏は、ええじゃないかの情報伝達のなかで領主の触れや手紙を運ぶ飛脚や村にいる定使の役割について言及している²⁴。東海道吉田宿のお札降りの最中にニュース性の高い「東海道吉田宿惣町御かげの次第」の木版の摺り物が出回る。吉田城下の町名と施行品（投餅・赤飯・投銭・神酒・投手拭）の情報が、吉田町だけでなく周辺の村々や遠方までへ伝わる。江戸や大坂などでええじゃないかを扱った錦絵や摺り物が出回り、情報が急速に、また広範に伝わったことを明らかにしている。

第五に、災害情報に関する研究である。江戸時代は大地震と大津波が何度も起きている。慶長大地震（1605年）・宝永大地震（1707年）・安政東海・南海大地震（1854年）・安政江戸大地震（1855年）など震度6以上を記録している。北原糸子の先駆的な研究があったが²⁵、災害情報に関する研究は研究者の問題意識に共有されてこなかった。3.11 東日本大震災を経験し、あらためて災害情報と向き合うようになった。青木美智男は、日本社会の都市化こそが被害地震の増大と被害拡大、人命喪失の最大の要因であることを指摘している。災害史研究を一過性で終わらせないためにも、自然破壊と「いのち」の立場からの研究の重要性を「遺言」として残している²⁶。

3.11 で大被害を蒙った三陸地域は、1896年に明治三陸津波を経験し、37年後の1933年に昭和三陸地震を経験した。寺田寅彦は、昭和三陸津波の際に、「自然」は過去の習慣に忠実である。地震や津浪は新思想の流行などには委細かまわず、頑固に、保守的執念深くやって来る」と注意を促し、人間にできる「残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう」と警告を発している²⁷。

明治と昭和の大津波で集落が全滅した岩手県宮古市の姉吉集落は、「高き住居は 児孫の和楽、想へ惨禍の大津浪、此処より下に 家を建てるな」という記念碑を建立した。この警句の下には「明治二十九年にも昭和八年にも津浪は此処まで来て部落は全滅し生存者僅かに前に二人後に四人のみ幾歳経るとも要心あれ」と記されている²⁸。大津波の記憶が記念碑を通して受け継がれ、3.11 では津波は記念碑の50メートル手前で止まり、集落全員が無事であった。

災害情報の研究は、津波とたたかった人を再発見する。浜口梧陵（1820-1885年）もその一人である²⁹。浜口家の本拠は紀州広村（和歌山県広川町）で、銚子で醤油醸造業（ヤマサ醤油）を代々営む家である。梧陵は浜口儀兵衛の七代目に当る。梧陵が大津波から村民を救った話しは、ラフカディオ・ハーンの「A Living God（生ける神）」という物語になり、「稲むらの火」として教科書に掲載されて

いる。

梧陵は 1854 年安政の南海大地震の際に、焚き火で高台にある広八幡に避難させ、焚出と避難所の手配、救援米の手配をした。また、家 50 棟を自費で造り、極貧者に無料で提供した。公共事業として大防波堤を構想し、約 2m の旧堤防の背後に、大津波に耐える高さ 5m、延長 1 km の大防波堤を造ろうとした。数年にわたる建設事業により、村民の仕事と生活を保障し、従事した人数は日に 400~500 人、延べ 5 万 6 千人に達した。農地を堤防造成用地に転換し、重い年貢を負担軽減した。堤防は被災の翌年から着工され、4 年後の 1858 年（安政 5）にひとまず完工した。高さ 5m、幅 20m、長さ 600m の大堤防である。堤防補強のために、外面堤脚に数千株の松樹を栽え、堤内堤上に数百株の樺樹を栽えた。

安政南海地震から 92 年後の 1946 年（昭和 21）12 月 21 日昭和南海地震の際に、広村はこの防波堤により大きな被害をまぬがれた。百年先を見据えた堤防の建設であった。

このように、本学部で「歴史情報論」を担当する中で研究を進めてきたが、定年退職によって時間の余裕ができたので、貴重な地域文化財の保存という意味で森村新蔵「享和以来新聞記」の翻刻の作業を進めている。アジア・太平洋戦争も、3.11 東日本大震災も、「人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力する」ことがいかに重要であるかを教えてくれる。

おわりに

教養部の改組から創設された全国の新構想学部の中で、社会情報学部は「情報」という切り口で人文科学・社会科学を総合していくという点で学部の特徴がある。本学部の良さは、社会学・心理学・文学・思想文化から政治学・法律学・経済学・経営学・環境科学などの諸学問を広く学びながら、情報という切り口で総合的に学ぶことができることである。

高度情報化にともなう社会の地殻変動は、情報技術のみならず経済や政治、さらには学問・文化のあり方にまで及んでおり、情報現象を根底から捉える批判的知性が求められる時代になった。高度情報社会が要請する諸課題を解決し、地域との連携を強めていくためには、プロジェクト研究をより一層活性化させ、研究支援していく恒常的な研究体制を組織化することが必要不可欠になっている。そのような社会の要請のなかで、2008 年 10 月に群馬大学社会情報学部附属社会情報学研究センターが設立された。

社会情報学部は学位授与機構による第一期の研究評価で「期待される水準を上回る」という高い評価を得た。その理由として、教員の研究活動や科研費の採択数だけでなく、「日本社会情報学会の創設以来、理事・幹事等の役職者を輩出し、学会運営の中心的な役割を果たし、社会情報学の確立と推進を進めてきた」ことがあげられる。

学部の研究は二つの柱から成り立っている。

一つの柱は社会情報学独自の研究領域の独自な開拓である。たとえば、厚労省研究班によると、ネット依存の中高生が 52 万人いるというアンケート結果が出ている³⁰。依存の割合は、女子 10%、男子

6%。女子が高い理由は、チャットやメールを多く使うためとされる。高校生女子で、「休日で5時間以上」は22%、高校生男子は21%である。このような青少年のネット依存は、本学部では伊藤賢一教授を中心にして日本や韓国におけるオンラインゲーム依存の研究が進められており、社会情報学らしい研究の展開が期待される。

もう一つの柱は情報の視点から自分の専門研究を捉え直すことである。具体的には、『群馬大学社会情報学ハンドブック』の第二版の刊行である。ハンドブックは、社会情報学部の研究の構図を見るのに役立っている。第一版の刊行から8年が過ぎ、執筆者29人のうち14人はすでに本学部には所属していない。その意味では、現スタッフの特に若手中堅の教員が現在の学部の研究構図を明らかにすることを期待している。

32年間の教員生活を振り返ると、2004年の国立大学の法人化によって大学の世界は質的に変化した。国立大学においては研究費が減少し、入試の広報活動や評価作業などの管理運営の雑務が増える中で、人文・社会科学の論文数は減少しつつある。運営交付金の毎年の減額や教授会の人事権の学長への一元管理に伴い、教員の後任補充が十分に行われなくなり、このままだと日本における人文・社会科学の学問は衰退していく傾向にある。

地域に根ざした大学が生き残っていくことは大変なことであるが、現実が提起する問題を真摯に受け止め、社会情報学部が高度情報社会において活躍できる高度専門職業人の養成と「地域の知的拠点」として今まで以上に活躍することを期待したい。

注

- 1 正村俊之「情報社会論から社会情報学へ」(『パラダイムとしての社会情報学』, 早稲田大学出版会, 2003年)
- 2 佐藤卓己『メディア社会』(岩波新書, 2006年)
- 3 『福沢諭吉全集 第5巻』(岩波書店, 1959年)
- 4 『思想』1048号(2011年第8号)
- 5 網野善彦『無縁・公界・楽』(平凡社, 1978年), 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』(平凡社, 1974年)
- 6 「回顧と自問」(『安丸思想史への対論』, ペリかん社, 2010年)
- 7 『汚辱の近現代史』(徳間書房, 1996年)
- 8 『99%のための経済学入門』(大月書店, 2012年)
- 9 歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリティ』(東京大学出版会, 2013年)
- 10 『田中正造文集(二)』(岩波文庫, 2005年)
- 11 「歴史学研究」625号(1991年11月)
- 12 『思想』831号(1993年9月)
- 13 落合延孝『幕末民衆の情報世界』(有志舎, 2006年)
- 14 吉原健一郎『江戸の情報屋』(NHKブックス, 1978年), 中井信彦『片葉雑記 色川三中黒船風聞日記』(慶友社, 1986年), 『藤岡屋日記』全十五巻(三一書房, 1987-95年), 佐藤誠朗『近江商人幕末維新見聞録』(三省堂, 1990年), 岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』(吉川弘文館, 2001年)など多数。
- 15 『歴史評論』630号(2002年10月)
- 16 酒井紀美『中世のうわさ』(吉川弘文館, 1997年), 山田邦明『戦国のコミュニケーション』(吉川弘文館, 2002年)。

-
- 17 鈴木浩三『江戸の風評被害』(筑摩書房, 2013年)
 - 18 「上州の飛脚問屋について」(地方史研究協議会編『交流の地域史—群馬の山・川・道』, 雄山社, 2005年)
 - 19 『深読み浮世風呂』(小学館, 2003年)
 - 20 『近世日本の歴史意識と情報空間』(名著出版, 2010年)
 - 21 富善一敏「民間文書管理の進展」(『享保改革と社会変容』, 吉川弘文館, 2003年)
 - 22 『革命的群衆』(二宮宏之訳, 創文社, 1982年)
 - 23 『酒呑童子異聞』(岩波書店, 1992年)
 - 24 『ええじゃないか』(愛知大学総合郷土研究所ブックレット, 2001年)
 - 25 『安政大地震と民衆』(三一書房, 1983年), 『近世災害情報論』(塙書房, 2003年), 『日本災害史』(吉川弘文館, 2006年)など。
 - 26 「日本近世農民運動史から生活文化史研究へ」(『歴史評論』760号, 2013年8月)
 - 27 「津浪と人間」(『天災と日本人』角川ソフィア文庫, 2011年)
 - 28 高山文彦「『三陸海岸大津波』を歩く」(文藝春秋編『吉村昭が伝えたかったこと』, 文春文庫, 2013年)
 - 29 杉村廣太郎『濱口梧陵傳』(濱口梧陵銅像建設委員会, 1920年), 戸石四郎『津波とたたかった人—濱口梧陵伝』(新日本出版社, 2005年)
 - 30 「朝日新聞」2013年8月2日付